を辞めました。

母は「これからは女性が仕事をする時代。辞めんで頑張りぃ」と言ってくれたし、とても好きな仕事だったので続けたかったのですが、当時はどうしようもありませんでした。

子育てが落ち着いた頃、社会と関わりを持ちたいと思い、「やまぐち女性カレッジ」の研修に参加しました。「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業や、社会的・文化的に「つくられた性」を学び、社会の仕組みの中で、自分の意志とは違う生き方を選択せざるを得ない女性が私以外にもたくさんいる、ということに気づきました。

この研修で一緒に学んだ女性たちとともに、学ぶ場をつくったことが団体設立のきっかけです。

「やまぐちネットワークエコー」は、今年で25周年を迎えます。活動の根底には、女性が自ら「働く」ことを選択し、自己決定できる社会を応援したいという思いがあります。そのために、学びを楽しめる場をつくっていくことが大切だと考えます。

会員は、子育て支援、防災、文化活動、スポーツなど、県内各地で様々な活動をしていますので、幅広い視点で課題を出し合うことができます。男女が共に持てる力を発揮して、助け合い、支え合うことを共通項として活動しています。

活動される中でのご苦労や喜びについて教えてください。

一番苦労しているのは資金調達です。会費だけでは、やりたいことを実現させるのは難しく、助成金を活用していますが、頼りすぎてもいけません。

活動の一番の財産は、一緒に成し遂げたいと思える仲間がいることです。失敗もあるけれど、成功したときの達成感は何より嬉しいものです。

ボランティアなので、金銭面や時間の負担があります。けれど、それ以上に得るものがあり、元気をもらえ、次のエネルギーに変わるから、続けることができます。

「その人らしく働く」ために大切なことは何だと思いますか。

私は特に、シニア世代の働き方に注目しています。子育て・介護と仕事の両立についての調査研究をした結果、仕事を続けられない女性が今でもたくさんいる、という課題が見えてきました。そこで、地域のシニア層が、働く若い世代のサポートをできないだろうか、ということを考えました。

人生100歳時代と言われており、60歳で定年してからの人生は長いです。若い人が働きづらい部分をサポートする、年齢に応じた働き方が見つかればと思っています。どんな人も意欲を持って働き、責任を果たし、「必要とされている」と感じることで生活にハリが出ますし、それが若い世代の子育てを支えることにつながるなら、なお嬉しいです。

また、若い世代の方たちには、「女は家庭、男は仕事」というジェンダーへのこだわりに縛られず、人生を自己決定できる力を身につけてもらいたいです。そのためには、知ること、学ぶことが必要です。そして、仕事以外のいろいろな分野に関わり、新しい価値観を知ってほしいです。それは必ず仕事に活きる好循環を生むと思っています。

今後、どのように活動を展開されたいですか。

県域での団体の活動は、いずれ若い世代に引き継ぎたいと思っています。私自身は、自分が暮らす地域で、役に立つ活動を続けていきたい、という思いがあります。地域には、多彩な活動をされている方がたくさんいらっしゃいますので、出会いも楽しんでいます。

若い世代を応援できるシニアならではの活動を、試行錯誤しながら実践していきます。

（取材：久保田、小柳）

多様な働き方をかたちにするためには、お互いに支える環境づくりが欠かせません。

今回、取材させていただいた方々の「私はどうありたいか」に向き合う姿勢に接することで、自分自身の働き方・生き方を考え、決定する力の大切さを改めて感じました。